

令和元年度 第2回部活動活性化推進協議会議事録

実施日 令和2年2月5日

会 場 スポーツ局2階共用会議室

○小松（司会／保健体育課GL 以下「司会小松」で記載）

ただいまから令和元年度第2回部活動活性化推進協議会を開催する。

開催に先立ち、保健体育課長幸田より挨拶申し上げる。

○幸田（委員長／保健体育課長 以下「幸田委員長」で記載）

こんにちは。大変お忙しい中、本活性化推進協議会にご出席いただき感謝する。

また、日頃より、部活動の推進にご尽力いただき感謝申し上げます。本日も本協議会のアドバイザーとして、第1回に続き、早稲田大学スポーツ科学学術院、中澤先生にご出席をいただいている。先生、よろしく願います。

8月28日に実施した、第1回の部活動活性化推進協議会では、皆様から今後の活動のあり方について多方面にわたりご意見を頂戴した。その後、11月11日に実施した、ワーキンググループ会議においても、後にお示しする「新部活動プラン」の方向性について、ワーキンググループの皆様から多数ご示唆をいただき感謝する。頂戴した意見については、事務局で持ち帰り、新プランの骨子や各事業の策定にあたっての参考とさせていただいた。

本日は検討した新プランの枠組み、事業の柱、構成している事業内容等について、事務局より説明をさせていただき、改めて皆様からご意見を頂戴したい。予算削減で厳しい状況だが、持続可能な部活動の実現に向け、新プラン策定に取り組んで参るので、本日は限られた時間であるが、よろしく願います。

○司会小松

本協議会は、今回で2回目となるが、今回初めてご出席いただく方もいるので、初めに委員及び事務局の紹介をさせていただきたい。次第の裏面に、座席表、参考資料2に協議会出席者一覧があるので、ご覧いただきたい。なお、県立学校長会議からご推薦をいただいている布川校長先生に、協議会の副委員長をお願いしているが、本日は公務の都合により急遽欠席とさせていただく。

では、順に自己紹介をお願いします。まず、県PTA連合会の佐々木様から願います。

○佐々木委員（県高等学校PTA連合会副会長／以下「佐々木委員」で記載）

県立高等学校PTA連合会の佐々木と申す。前は石倉副会長が出席したが、今日は佐々木が出席する。よろしく願います。

○谷委員（県教職員組合執行副委員長／以下「谷委員」で記載）

神奈川県教職員組合の谷と申す。前回に引き続き、よろしく願います。

○岩崎委員（県高等学校教職員組合副委員長／以下「岩崎委員」と記載）

高等学校教職員組合の岩崎と申す。本来、飯田が出席予定だったが、代理で出席する。よろしく願います。

○大塚委員（県立体育センター所長／以下「大塚委員」と記載）

県立体育センターの大塚と申す。この4月1日からいよいよスポーツセンターがオープンする。いろいろ

ろなところで期待に応えられるように準備して参るので、ご活用いただければと思う。スポーツセンターだが、グリーンハウスなどは、文化的な部分でも活用いただきたいと考えているので、よろしく願います。

○濱田委員（高校教育課参事兼課長／以下「濱田委員」と記載）

教育委員会高校教育課長の濱田と申す。よろしく願います。

○山田委員（私学振興課／以下「山田委員」と記載）

私学振興課の山田と申す。本来ならば課長代理の日置が出席するところだが、代理で出席する。よろしく願います。

○三枝委員（スポーツ局スポーツ課長代理／以下「三枝委員」と記載）

スポーツ局スポーツ課三枝と申す。よろしく願います。

○櫻井事務局員（高校教育課員／以下「櫻井事務局員」と記載）

高校教育課高校教育企画室櫻井と申す。よろしく願います。

○濱田事務局員（保健体育課員／以下「濱田事務局員」と記載）

保健体育課学校体育指導グループ濱田と申す。よろしく願います。

○根布屋事務局員（保健体育課員／以下「根布屋事務局員」と記載）

保健体育課の根布屋と申す。よろしく願います。

○石曾根委員（県中学校文化連盟会長／以下「石曾根委員」と記載）

県の中学校文化連盟会長の石曾根と申す。よろしく願います。

○富樫委員（県高文連会長／以下「富樫委員」と記載）

県高等学校文化連盟の会長をしている富樫と申す。よろしく願います。

○西山委員（県中体連会長／以下「西山委員」と記載）

県中体連の会長をしている西山と申す。横浜市立洋光台第二中学校の校長である。よろしく願います。

○松本委員（県高体連理事長／以下「松本委員」と記載）

神奈川県高等学校体育連盟理事長をしている松本と申す。本来、山田会長が来るところだが、公務の関係で、代わりに参った。よろしく願います。

○小野委員（県体育協会専務理事／以下「小野委員」と記載）

体育協会の小野と申す。よろしく願います。

○木田委員（私立中高協会事務局員／以下「木田委員」と記載）

中高協会事務局の木田と申す。関東学院中高、六浦中高の富山委員の代理できた、よろしく願います。

○森山委員（県公立中学校長会書記／以下「森山委員」と記載）

県中学校長会の代表で出席している、森山と申す。よろしく願います。

○吉田委員（教育事務所長会・中教育事務所長／以下「吉田委員」と記載）

教育事務所4教育事務所の代表として参った、中教育事務所の吉田と申す。よろしく願います。

○幸田委員長

改めまして、保健体育課の幸田と申す。よろしく願います。

○司会小松

保健体育課の小松と申す。よろしく願います。

続いて、本日のアドバイザーの先生を紹介させていただく。第1回に引き続き、早稲田大学スポーツ科学学術院、中澤篤史准教授にアドバイザーをお願いした。

中澤先生はスポーツ社会学を専門とし、運動部活動の社会学を研究課題とされている。昨年度も本協議会のアドバイザーをお願いしている。中澤先生一言願います。

○中澤先生（早稲田大学スポーツ科学学術院准教授／以下「中澤先生」と記載）

こんにちは、中澤と申す。一昨年来より係らせていただいている。研究者の立場から部活動の情報をなるべく多く提供して、神奈川県の一部活動の方向性を考えることに貢献したいと思うので、よろしく願います。

○司会小松

それでは、本日お配りした資料の確認をさせていただく。資料1、資料2を用意している。また参考資料1として、本協議会の設置要綱、参考資料2として出席者一覧を配付した。不足等があれば事務局にお声かけいただきたい。

協議会に入らせていただく前に、ご案内をさせていただく。本協議会は原則公開となっている。協議内容については、録音し、発言内容を文書にて保健体育課のホームページで公開をさせていただく。公開する内容については議事録を事前に発送させていただくので、ご確認いただき、その上で公表をする。

ここからの進行は、第1回の協議会と同様に設置要綱第7条により、委員長による進行とさせていただく。

○幸田委員長

改めまして、皆さんよろしく願います。委員長を務めさせていただく幸田である。早速だが、協議事項の方に入らせていただく。

神奈川県の「新部活動プラン」について、事務局より説明をする。

○濱田事務局員

こんにちは、保健体育課の濱田と申す。資料1と資料2を使ってご説明をさせていただく。

まず、「資料1」の「新部活動プラン」に関しては、未定稿なので、赤字で示させていただいている。

また、「資料1」だが、第1回部活動活性化推進協議会と第1回部活動活性化推進協議会のワーキンググループでいただいたご意見を基に事務局で作成をしたものである。最終的には、この協議会でもう一度ご意見をいただき、完成させたいと考えている。

なお、今回の「新部活動プラン」作成においては、「地域連携への糸口」を作っていくという点と、「今ある財産を継承」しながら、どのような部活動の形が神奈川県に適しているのか、どのような形が神奈川県の子どもの育成環境として適しているのか、ということを中心に二つのテーマとして、本県の部活動の地域連携も模索しながら持続可能な部活動の環境づくりを念頭に考えた。

それでは、1ページをご覧ください。「新部活動プラン」策定の趣旨であるが、平成11年3月にスポーツ推進審議会から示された学校の部活動の活性化と、今後のあり方についてを踏まえ、これまで県教育委員会では運動部活動を活性化するための様々な取組を行ってきた。また、文化部活動についても、平成14年度に全国高等学校総合文化祭を本県で開催したことを契機に、県高等学校文化連盟の組織充実や、各学校の文化部活動の奨励に取り組んできた。そして、平成19年には、かながわ部活ドリームプラ

ン21、平成23年にかがわ部活ドリームプラン21バージョンⅡ、平成27年にかがわ部活ドリームプランバージョンⅢを策定し、部活動を通して生徒の学校生活をより一層充実させていくために、運動部活動だけでなく、文化部活動も合わせて参加促進や、競技力・表現力向上などを目指し、地域や民間企業、団体などと連携、協働した取組等を今日まで実施してきた。

ここまでの文章は、現行のプランを踏襲し、今までの概要や変遷を記している。

12行目の「しかしながら」から「学校ではこの社会状況の変化や子供たちの様々な生活環境を踏まえ、一人一人の個性や教育的ニーズに応じた適切な指導及び支援を行うことができるよう、学校教育活動のより一層の充実を図る必要がある。」までは、令和元年度10月に改定した教育ビジョンから引用している。

それ以降は、この二つを鑑みながら事務局で文章を作成した。

続いて、部活動の役割についてであるが、役割に関しては前回とほぼ変わっていない。

続いて2ページをご覧いただきたい。「3」部活動の現状であるが、こちらは部活動の現状を把握するための項目である。大きく分けて「入部率の状況」、「生徒の意識」、「負傷状況」、「指導者の状況」、この4つの観点から記している。冊子にする際にはもっと細かくさせていただき、経年変化等を見ていただけるように作り込んでいく。なお、本日に關しては、わかりやすくするように、今年度、或いは一番直近のデータを載せた。

続いて「(2) 生徒の意識」であるが、平成29年度運動部活動等に関する実態調査より得られたデータだが、部活動に対し、学校生活の中でも部活動が貴重な時間であるというようなことが推測できるデータが反映されている。

続いて、「(3) 負傷状況」である。こちらは平成30年度の神奈川県内の負傷状況を出したものである。平成26年以降では一番低い数字となっているが、今なお約4000件のいろいろな負傷があるので、こちらに関しても、部活動を進めていく上では、子どもたちの安心、安全を鑑みながら効率よく進めていくことが必要であるというように考えている。

「(4) 指導者の状況」であるが、教員の多忙化は、社会的な問題として今取り上げられている。長時間勤務の一因として、部活動が挙げられており、授業指導や授業計画、準備等といった学習指導のための時間に次いで、部活動指導に係る時間が長いと言われている。また、本県における教員の平均年齢の推移は公立中学校、県立高等学校ともに年々若くなっており、教職経験年数が浅く、部活動指導経験の浅い顧問が年々増えているということが考えられる。なお、部活動指導経験の浅い顧問教員が専門的な指導に不安を抱いているということは研修会を通して窺い知ることができる状況である。

そこで、県教育委員会としては、すべての県立高等学校に技術指導を行う際の補助を目的として、部活動インストラクターを配置している。また、平成30年度より技術指導はもちろん、生活指導や部費の管理、保護者対応など、教員と同じような職責を担うことができる部活動指導員の配置もしている。しかし、現状としては、すべてに配置できているという状況ではない。なお、下の表が教員の平均年齢の推移になっている。

事務局では第1回協議会及び、ワーキンググループでの協議を基に、現状を把握し、部活動が持つ課題を挙げさせていただいた。

続いて、「4」部活動の課題に移る。

「(1) 社会情勢の変化への対応」、「(2) 多様化する生徒のニーズの変化への対応」、「(3) 適切な部

活動の運営」、この3つを課題として、課題をどのように克服していくかということ、新プランで考えていかなければならないと考えた。

3月に保護者と生徒と、先生方に向けて、アンケートを抽出校でお願いしようと考えている。「部活動」に対し、保護者が持っているイメージ、子どもが持っているイメージ、先生方が持っているイメージ、これからどのように部活動が進んでいくかということも踏まえ、部活動の課題をより鮮明にしたい。

○幸田委員長

新プランについての中核に入る前の前段のところについて説明をした。「策定の趣旨」、「部活動の役割」「部活動の現状」、「部活動の課題」という点でご説明した。

ここまでのところで皆様方から何かご意見ご質問等あれば頂戴したい。

○谷委員

教職員組合の谷である。3ページ目、指導者の状況についてだが、超時間勤務の一因として部活動が挙げられていて、「部活動指導に関わる時間が長いと言われている」という表記になっているが、各種調査で明らかになっている事実だというように考えたときに、「と言われている」という表現だと少し弱いという気がする。それ以外のところについては、言い切っているので、「部活動にかかる時間が長いということが明らかになっている」という形で書いていただいた方がよりはっきりすると思う。

○幸田委員長

ここについては、改めて事務局の方で根拠を確認して表現等、検討する。他にいかがか。

○西山委員

県中体連西山である。後々説明があるかもしれないが、今ご説明いただいた中で、4ページ、「4」部活動の課題の、「(2) 多様化する生徒のニーズの変化への対応」で、それに応えるべく環境整備が求められており、最もだと思うが、これと8月のところで、「神奈川県中部の部活動のあり方」を提示していただいたが、「生徒のニーズを踏まえた環境の整備」という項目があり、学校においては、競技力・表現力上昇志向、レクリエーション志向、健康志向、複数活動志向などの、多様な選択肢の部活動を設置するなどの工夫が強いられているが、もしこのニーズに応えながら加入率も上げるということになると、現場は混乱すると思うが、前回の提示と、今回の関係性などが明らかになっているところがあれば教えていただきたい。

○濱田事務局員

前回のものと今回のものが大きく変わっているという状況ではない。すべての生徒のニーズに応じていかなければならないということではなく、例えば今念頭に置いているのは、広域的な地域での部活動の展開で、市町村によっては、中学校が1校しかないところがある。そうすると部活動自体が活動できないという状況も中には出てきて、そこで地域のスポーツクラブや文化クラブなどがあれば、活動拠点を作り、そこで活動をしたり、市町村を越えた違う学校に出向き、合同部活動をするような形で、その子どもたちが活動できるようなことを担保できないか、というところを今模索している。すべての子どものニーズに応えるべく、子どもたちがこの部活動を作りたいと言っているからやろう、というようなところまでは考えていない。

どのようなことが考えられるかということも、現場が四苦八苦するような状況ではなく、対応できるような形を模索したい。

○西山委員

前回ご提示いただいた「部活動のあり方に関する方針等」は、上位下位でいうと、どちらが上位になるものか。

○濱田事務局員

方針が上位である。方針を受けて作っていくものである。

○西山委員

そうすると、「多様な選択のできる部活動を設置する」という縛りは、後々どこまで現場に降りてくるのか。例えば、ゆるスポーツや、eスポーツなども含めて、将来的には現場で対応しなければならなくなるのか。

○濱田事務局員

時間をいただき、答えさせていただくということによいか。

○中澤先生

今までのご意見に対して、私なりのコメントもしながら、議論を活性化したいと思う。

谷委員のおっしゃった教員の長時間勤務は非常に大きな問題になっているところは、各種調査から明らかである。県教育委員会として残業というものをどれだけ認めるかという立場の問題はあるかと思うが、しっかり事実を見据えて、政策を打って、責任を果たしていただきたいと思う。

西山委員のご意見は最もだと思う。生徒のニーズを満たさなければいけない。あれもこれも、レクリエーションから競技志向まで、これで現場を混乱させることになってはならない。ニーズという言葉が非常に強い言葉で、国も使うが、そもそも、障害者福祉や、福祉行政の方で社会的にこれだけは満たさなければいけないという必要が「ニーズ」という言葉で使われている。その意味で言うとニーズは授業のほずである。自主的、自発的に参加する部活動というものは、やはりその設置のあり方を現場に委ねて、それを支えるというところで政策が答える方が良いのではないかと考える。「これは生徒のニーズだから」というように非常に期待値をあげてしまうと、苦しさというものがいろいろ出てきてしまうのではないかと思う。

重ねて私からの質問させていただくが、今回の「新部活動プラン」のドラフト案作成、大変なご尽力だと思う。今まで行ってきた県教育委員会や市町村で作成している部活動のガイドライン。そのガイドラインとのリンクが見えないと、現場におろして実践ができないと思うが、今までやってきたことをどのように踏まえたり補完したり、関係し合っているのか、このあたりをお聞かせ願う。

○濱田事務局員

方針等々だが、「(3) 適切な部活動の運営」のところでは反映されている。例えば「神奈川県部の活動の在り方に関する方針」には、活動時間を「平日2時間程度、週末3時間程度」としている、この時間の中で、いかに効率的に合理的にそれで効果を出すかということ踏まえると、効果的な実施に向けた研修を行ったり、今問題になっているセクシャルハラスメント、体罰など、適切な指導に向けた研修も含めて。適切な部活動の運営というところで職員に浸透させていきたいと考えている。

○幸田委員長

他にいかがか。

○佐々木委員

先ほどより出ている話と少し重複するが、3ページ目の「(4) 指導者の状況」で、先生方の長時間労

働について、部活に関することが書かれているが、4ページ目の課題のところにある、「(3) 適切な部活動の運営」の中に、先生方の負担を減らすことなども含まれているのか。

○濱田事務局員

含まれている

○幸田委員長

他にいかがか。

○小野委員

体育協会の小野である。今、総論、全体的な入口の話をしているが、前回の会議でも申し上げたが、中学校と、高校では切り口が分かれているのではないかと考えているが、一応全体として全部をとらえているのか。

○濱田事務局員

全体として捉えている。

○小野委員

この後の細かい計画もそれで同じような方向で流れていくと理解してよいか。

○濱田事務局員

環境整備の中のサポート事業の中にも、中体連補助がある。一応全体は見据えているところである。

○小野委員

中学校と高校だと、課題も大分違っているし、内容も違ってくると思う。課題をまとめてとすると、例えば文化部と運動部でも少し違うと思う。その辺のところもどこかに入れ込んでもらえると、わかりやすくなる。

一番は、主旨のところは、見た瞬間に教育ビジョンの文書を使っている。教育ビジョンの文書は毎回使っており、10年ぐらい使っている文章である。なぜ今部活動が抱える問題を解決しなければならないか、プランを新しくしなければならないかということを、今の社会現象のことも踏まえ入れ込んでいくような作りにするべきである。

ぜひ変えるのだということが強く出て、こういう理由で変えたのだということが明確になるような、それを受けて、だからこういう事業をするということがわかるような抽象的でなく、具体的なことを入れていただければと思う。

○幸田委員長

他にいかがか。

○小野委員

新部活動プランの名称は、赤字で書いてあるもので確定か。

○濱田事務局員

確定ではない。この協議会で決めさせていただきたい。

○幸田委員長

他にいかがか。

○三枝委員

根本的な質問になって申し訳ないが、部活動のプランというのは、ドリームプランがあったかと思うが、今後永続的にこういったものを設置していくという方針なのか。

部活動は普遍的な要素があり、時代が変わってもそれほど大きく変わらないのではないかと個人的に思っている。新しい何かをどんどん入れていかなければならないというプランを、今後描いていかなければならないとなると、非常に困難なのではないかと考えている。

ただ部活動は活性化したほうが良いと私も思うので、今後はどのように考えるか、ドリームプランも結局長い間同じような形で実施し、少し衣替えをして編成した経緯があるかと思うが、作成していく厳しさというのも現実的にはあると考える。

○幸田委員長

保健体育課の中でもまだ、しっかりとした考えとしてはまとまってないのが正直なところである。これまでのドリームプランというのが、非常によくでき上がっており、ここから新しいプランに変えていったときに、本当に新プランと言えるほどの変化が打ち出せるかというところは、一つ心配な点だというように考えている。三枝委員がおっしゃる通り、例えばこれを新プランというような、一つの大きなプランというようなものではなく、例えば部活動活性化推進事業というような事業にして、個別の事業でそれを行っていくというような方法もあるというようには思っているところである。

ただ、今のところ検討している中では一つ、ここで区切りをつけて、また新しい方向性を見出していきたいというのが保健体育課の考えである。

他にいかがか。

○小野委員

部活動は、相当変わってくるのではないかと思います。特に中学校は、おそらくここ数年で激変するぐらい変わることが予想される。私が知っている限りでは、かなり過激な話を聞いている。三枝委員がおっしゃったような、「部活の考え方」は変わらないと思うが、流れとか、形とか、手法とか段取りとか、おそらく変わるのではないかと思います。だから、こういったプランを作って先生方が見たときに、こうなっているということが分かるものを作る必要がある。

想像できないような変わり方をするのではないかと、個人的に思っている。

○吉田委員

同じ考えである。今、小学生が激減している。中学生もこれから減ってくるので、持続可能などは本当に部員数を増やそう、ということがメインなのかは少し考えていかなければならないと感じている。それと、本当に中学校の課題とは何なのかということが出てないので、出していかないといけない。今、県立高校は基本的に144校で変わらないが、小学校は400校まで減っている。そこをどのようにやっていくのかという事。先ほどもあった、働き方改革の観点でいくと全く逆行する側面もある。新しい時代というところをきちんと課題を出した上で、折衷なところも含めてやっていかなければならないと感じている。お願いしたいのは、小中も含めたその問題点等も調べ、出していただきたい。

○幸田委員長

他にいかがか。あれば後程、全体を通したところでご発言いただきたい。

それでは一旦、ここで切らせていただき、引き続き5ページから、事務局より説明をする。

○濱田事務局員

現プランであるが、目標としては、加入率を活性化の指標としている。新プランでは、先ほど申し上げた3つの課題を基にして、各々の生徒の充実感、各々の生徒の満足率を、活性化の指標とし、部活動の活性化を図って参りたい。

目標及び基本方針をご覧いただきたい。目標であるが、持続可能な部活動の環境づくりをし、人間力を育む、ということを目標とし、目標を数値目標（仮）というようになっているが、今、黒塗りになっているところを、アンケートなども踏まえ、適正な数値を入れていきたいと考えている。

基本方針であるが、持続可能な部活動の環境づくり、こちらを進めていく。その部活動の持続可能な環境づくりに向けた三つの柱として、「研修」、「地域連携」、「指導者を派遣」を作り、プランを考えて参りたい。

先ほど中澤先生からもお話しいただいたが、今までもいろいろな研修を重ねてきた。研修をどのように行えば効率良く先生方にまでお伝えすることができるかを考えていきたい。全体の目標及び基本方針は以上である。

○幸田委員長

新プランの目標及び基本方針の説明をした。このあと詳細については、資料2の説明の中で具体的中身や関連性について事務局より説明する。

今提示された、目標や基本方針の内容についてご質問等あればお願いします。

○谷委員

指導者派遣の文言についてである。多くの人材が教員と連携協力しながらというところが、部活動指導員という方々も入って来ていただけるのであれば、ここは教職員と乗せておいていただいた方が、理解としては正しいと考える。

○幸田委員長

他にいかがか。

○中澤先生

ひとまず全容のご説明いただいたので、今の内容について、全体に対するコメントをさせていただく。目標及び基本方針のところでは持続可能性というものをキーワードにして、実際には生徒の満足度というものを政策課題とするというのは、私は良いと思う。おそらくドリームプラン、前回バージョンや前々回の目標は加入率という数字を持って行って、加入率を目標に掲げると、「みんな部活やれ」となってしまう。部活動をしたくない、或いは部活以外の場所で自主的に活動したい子どもが強制加入させられたり、そんな子どもも含めて教師、学校が面倒を見なくてはいけないという非常にアップアップした状態になったということが、他の自治体で課題になっているところがある。そうではなく、一人一人の子どもが満足するということに評価の軸を置こうとしたのは非常に良いなというように思う。ただこれがどう具体化されるかっていうところは、後のディテールについて説明があった時に聞きたい。

ただ、その全体について、率直に言うと、楽観的にすぎる、というような印象も持った。少し厳しい言い方かもしれないが、小野委員や吉田委員がおっしゃるように、部活動問題というのが、学校教育の現場で非常に大きくクローズアップされてきている。実際にこの会議にしろ、県教育委員会のガイドラインだけでなく、部活ハンドブック作成にしろ、そこに焦点化してきたはずなのに、10 数年前のドリームプラン、あるいは教育ビジョンの言葉に引っ張られながら、部活動の今の問題というものに焦点化しきれてないのではないか、という印象を持っている。部活動問題の今の問題は何か、私の理解だとやはり子どもが安心安全で本当に楽しめているのかという問題と、それを支える教師達が疲れ切って、部活動なんてさせられないということになっていないか、というところを学校教育の問題として、しっかり考え直すというところが大きな課題なのではないか。それはそれで、部活の持続可能性とか、数値目標の満足度

の数字で繋がっているが、小野委員もおっしゃったような策定の趣旨からの文章、そしてそこから現状評価と課題というところでは、はっきりとは伝わってこないような印象を持っている。

5ページのところで、目標があるが、これを読んでいると、やはり指導者目線であると感じてしまう。例えば目標は最後に人間力を育むとあり、やはり育むのは誰かと、指導者が育むのではないかと思えてしまい、そもそも自主的自発的な活動で、生徒が自ら成長していくことを大人は、サポートしていかなければならないのではないかと。

既存の部活動のあり方というものから、なかなか抜けにくい状況が見えてしまうところがある。

○幸田委員長

他にいかがか。

○佐々木委員

今まで「かながわ部活ドリームプラン」の時に加入率を指標としていたと聞いていました。今度は満足率ですといったときに、生徒に対して部活入りたくなければ入らなくていいよ、というように指導を学校でされることになるのか。例えばやりたい子どもだけが、やればいいというように捉えられないかなと、そもそもここに書いてある通り、生徒による自主的、主体的な部活動は、その通りだと思う部分もあるが、部活に入ったことによって自分が変わった、本当は入らなくてもよかったけど、入って3年間やってみて正直楽しかったな、という子どもたちも多いのかなという部分もある。加入させることが、確かに目的ではない、非常によくわかるが、もう加入しなくていいよと、やっている子どもだけが楽しめば良いよということにはならないか。指導する側も、入らなかつたら入らなくてもいいよというようにならないかと危惧している。

先ほど指導者目線というお話もあったが、子ども側の目線でやってみたくなるような言葉になるとまた違うのかなと、その辺がやはり弱いのかなという気はした。

○幸田委員長

他にいかがか。

続いて資料2の方を説明させていただく。資料2の方は、まず現行プランから新プランへの継承という部分、新プランの枠組みについて説明しその後個別の事業について説明をする。

○濱田事務局員

現行プランの成果をご覧いただきたい。

成果としては、部活動支援指導者の派遣により指導の質の向上について効果があった点、企業等連携協議会の連携事業により生徒の意欲向上に繋がった点、実践校及び各学校における参加促進の取組において一定のニーズに応えることができた。

成果がある反面、課題としては先ほど3つ出したが細分化すると、「生徒による自主的・主体的な部活動の浸透」、「社会情勢の変化と多様化する生徒のニーズへの対応」、「一部の種目・学校における部員不足」、「けがや事故のない練習方法の理解」、「専門指導者の不足」、「指導者の資質向上（体罰を含む不適切な指導の根絶や若手教員の育成等）」、というものが考えられる。

そこで、これまでの成果を継承しつつ、新たな計画を策定したものが新プランである。

新プランの基本方針をご覧いただきたい。

「持続可能な部活動の環境づくり」を整備していく中で「部活を通して人間力を育む」ということを基本方針とし、「持続可能な部活動の環境づくり」を実現するために、3つの視点を作成した。

1つ目は「財産の継承」、2つ目は時代やニーズに合わせた「変化への対応」、3つ目として「資源の活用」である。この3つの視点から、実現に向けた、「研修」と「地域連携」、「指導者派遣」という3つの柱と、下にある環境整備という側面から、実現にむけたアプローチをしていこうと考えている。

○幸田委員長

現行プランから新プランへの流れと、新プランの枠組みについて説明をした。

説明した内容について、何かご質問ご意見等あればお願いします。

○岩崎委員

根本的なことになるが、部活動の位置付け自体をどこかで確認しておかなければならないと考える。具体的に言うと、学習指導要領では、教育課程外という扱いになっているが、生徒の教育活動において、部活動はどういう位置付けなのか、教職員にとってはどこまでが本務でどこからは本務ではないとか、大きな新たなプランを作るということであれば、そこを押さえた上で、できることとできないこと、何が必要なのかということの論理構成が必要ではないか。

○幸田委員長

他にいかがか。では、新プランの各内容について説明する

○濱田事務局員

事業名をご覧いただきたい。赤の太字になっているところは、今ある事業をブラッシュアップし、さらに形を整えていく事業。黄色の太字の斜体のものは、新しく創生していく事業。黒字に関しては、今あるものを踏襲する事業である。

研修については、合理的、効率的、効果的な部活動運営に関する研修。体罰、不適切指導、セクシュアルハラスメントの根絶等、生徒の心身の育成を目指した環境づくりに向けた研修。指導者、保護者、生徒で共有できるような体制も含めて考えている。

適切な指導に向けた研修としては、部活動担当者会議というものがあるが、会議で説明するだけにとどまらず、どのような取組をすれば各学校に持ち帰り、各学校において説明をしたり、部活動をどのような形で進めれば効果的で効率的かということ浸透できるかを考えている。

例えば、その学校に持ち帰る際、プリント1枚で説明ができるような形を整え、持ち帰る先生が簡単で、短時間に説明できるように形を整えることで、学校に浸透させるなどのことを考えている。

指導力向上研修に関しては、現在資質向上研修があるが、面白い内容になっているが、興味のある方には効果的ではある反面、学校全体に波及させるにはどのような取組を進めればよいかを考えている。

次の生徒の心身の育成を目指した研修であるが、専門指導者研修という研修を考えている。例えば、高体連の専門委員の方から、各専門部でこのように部活動の運営をするべきだ、というような話をしていたら、各顧問へ浸透しやすくなるのではないかと考えており、できるだけ負担のない形で、実施し効果を得たいと考えている。

顧問、生徒、保護者への研修については、現在部活動マネジメント研修を実施している。こちらを保護者も一緒になり研修を受ける機会を創造し、教員と保護者と生徒が立場を理解し、意思疎通しながら、部活動を運営できるような土壌をつくりたい。研修に関しては以上である。

○幸田委員長

3つの柱のうち「研修」について説明した。

研修の部分について何かご質問ご意見等あればお願いします。

もし、また何かあれば、全体のところでご発言をいただきたい。

では続いて、2番「地域連携」について説明する。

○濱田事務局員

2番目の「地域連携」であるが、学校間連携、総合型地域スポーツクラブ・文化クラブとの連携、高大連携を通して生徒の多様なニーズに応えられる環境づくりを進めていくという観点で、生徒の多様なニーズに応えられる環境づくりを考えた。

学校間連携は、少数の部員しかいないチーム同士の合同チームや、指導者がいないところに指導者がいる部活動との合同練習の開催や、高校を拠点校とした校種等を跨いだ展開を模索している。

先ほど吉田委員からお話をいただいたが、今、生徒が激減する中で、中学校では、各市町村に中学校が1校しかないところがある。今後は市町村の中に中学校が無いということも想定できるため、各学校だけの枠組みや、隣の学校同士の枠組みでも成立しなくなることが予想される。市町村を跨がなければ成立しなくなるような状況も考えられるので、例えば高校を拠点にして、中学校が一緒になって活動できる環境づくりも考えている。ただ、こちらに関しても、ご意見を承りながら、これが実現できるのか、できないのかも含めて考えていかなければならないと考えている。

また、指導者がいないところで、地域クラブの方が指導することや、学校にやりたい生徒が少数いるが、活動場所がないところに対しては、活動場所と指導者をマッチングできないかということも模索している。

色々なことを鑑み、どのような形での実施形態が神奈川県状況と合い、それを運用できるかということも含め、考えていかなければならないと思っている。

総合型地域スポーツクラブとの連携、文化クラブとの連携、こちらもどのように連携していくかということも含め、令和10年までに神奈川に合った形のモデルケースを、ニーズに合った形で展開できる事業を1つか、2つ完成させたい。

高大連携に関しては、学生のトレーナーや、心理学を学んでいる学生などに、指導者と一緒に支援してもらい、実質的な効果とともに、様々な大人の姿を見ることによって学びの場を提供したい。

地域連携に関しては以上である。

○幸田委員長

「地域連携」の説明について何か、ご質問ご意見等あればお願いします。

○西山委員

この後にお話しさせていただくものと、部分的に関連がある内容であるが、教えていただきたい。総合型の地域スポーツクラブとの連携についてであるが、これらを具体の活動状況、設置状況や、今後の見通しというのは、神奈川県としてどのように考えているのかをお聞きしたい。

○三枝委員

スポーツ課で所管していることから、私から回答する。総合型地域スポーツクラブという言葉は、耳慣れない方もいらっしゃるかもしれないが、地域の中で、世代を越え、一緒に混ざり、色々な志向で色々な種目を一同に一つのクラブの中で活動していくというものが、総合型地域スポーツクラブである。スポーツ庁は総合型地域スポーツクラブを推奨しているおり、神奈川県では今、設立準備をしているところを入れ93~94ある。

今、申し上げた3つの特徴を兼ね備えているのが、総合型地域スポーツクラブだが、もともとはサッカー

ークラブから始まった。そこに、チアリーディングを入れるなど、多種多様なクラブがある。どの地域の小学校区域にも1つ作りたいたいというような目標をもっているが、まだそこまではなかなかいっていない状況であり、行政としてもその育成については、力を入れていこうと考えている。

反面、次から次へと生まれ、どこでもすごく活発に活動しているかという点、まだそこまでの状況ではない。

○幸田委員長

他にいかがか。

○小野委員

県体協の小野である。高大連携をもう一度説明していただきたい。

○濱田事務局員

担当レベルで話している内容であるが、例えばトレーナーであったり、心理学を学んでいる者にメンタルトレーニングをしてもらうなど、専門的知識を学んでいる学生を、色々な学校に派遣することによって、先生方の支援、生徒の支援をする。また、大学生には実践的な学びの場となることも予想でき、生徒にとってはキャリア教育の場になりながら、色々な大人と出会う機会を作ることができると考えている。

○小野委員

高大連携というのは、大学生を高校に派遣するという点か。高校だけを想定しているわけではないのか。

○濱田事務局員

そうである。

○小野委員

大学生の活用のようなイメージか。

○濱田事務局員

そうである。

○中澤先生

いくつかコメントさせていただく。

初めに「地域連携」の生徒の多様なニーズに応えられる環境づくりに関してであるが、基盤が時代のニーズに合わせて変化や、対応等があったから、その地域連携がどのようなものかという流れで説明するのが、事業の正当性や予算獲得には筋である。

これを見ると学校教育間での連携と、学校と学校外地域との連携という2つのパターンがあり、4つの事業提案がされていると思うが、その枠組みははっきりしている。

一つ一つ少しコメントすると、学校間連携合同チーム、合同練習等は非常に全国で進んでおり、実際にすでに県内でも幾つも行われていると思う。そこで課題になっているのが、どの学校で人数が足りない、どの学校に指導者がいないなどの情報ネットワークを整備するところである。さらに、今指導者の話があったが、練習した後に大会参加できることを担保しなければならない。おそらく中体連、高体連、あるいは、文化連盟等もそうしたことが認められる規定になっていると思うが、そうした日々の活動と生徒たちが楽しみにしている大会や、コンクールというものをうまくつなげるような制度設計が必要だと考える。

他の自治体だと学校と学校の構造部活動だけではなく、自治体主催の陸上クラブを用意しているよう

な自治体もあり、「学校同士うまくやってよ」と、丸投げするだけでなく県、あるいは市が主催するようなクラブというものを作ることでもできる。そこに複数の中学校や、高校が参加する総合型地域スポーツクラブ、あるいは文化クラブとの連携というのも、非常に重要視されている取組である。

その場合に、これもかねてからの課題であるが、地域のスポーツ・文化クラブがずっと期待してき、うまく連携できなかった一つの理由は、部活が部活としてずっとやっているからという側面がある。これはある意味マーケットを阻害するような形で、せっかくスポーツクラブを用意しているのに部活が忙しいから参加できないなど、その連携をうまくどう取るかというのが実務的な課題になる。

参考事例になるのがちょうど先月、長野県飯田市で1ヶ月間部活動オフにするという取組が行われた。これは私の聞く限り、成功したと聞いている。その時に、部活動を長期オフ、これは国のガイドライン、県のガイドラインでも求められていることであるが、なかなか、いろいろな地域でできてなかったが、しっかりシーズオフというものを作りますよ、ということとセットにして、そこで休むが、もっとやりたい生徒には新しい選択肢を与えようということで、地域のクラブや、プロのスポーツクラブがユース向けのイベントをしたりして、非常にうまくいったということを知っている。

こうした本県の連携事業をするとすると、部活動をどうやって、ダウンサイズしながら、子供たちの余裕をつくり出し、その余裕をうまく地域の方で受けとめるような、そうした全体のバランスを整えつつ行う必要がある。

最後に高大連携については、日頃大学生と接している私から言うと、なかなか簡単に活用させてもらえるような存在ではない。生徒が、魅力的に受けとめてくれるような内容だったり、条件など、非常にアルバイトで忙しかったりするので、こういうところにかけてなかなか大学生に期待すると裏切られてしまうかもしれないというように思う。

○幸田委員長

他にいかがか。

○小野委員

総合型地域スポーツクラブ・スポーツ少年団を入れておかないといけないのではないかと。時代の流れの中で、中学校の方は具体的な話が出てきている。ぜひ、入れておいて欲しい。

○幸田委員長

他にいかがか。

○吉田委員

研修の中に、中学校のことも少し入れていただき、ありがたいと思っているが、個人的にやはり働き方というところのバランスを取りながら実施する必要があると考える。研修や、地域連携をたくさんしてしまうと、逆効果になるところもあるのではないかと。お願いしたいのは、今、小野先生もおっしゃったように、中学生が高校生を見て、高校生のロールモデルになる人、凄く頑張っているところもあるし、余暇も上手に使っている高校生もいると思う、そんなロールモデルを中学生が見ることのできる機会もあるとありがたいなというように思う。

中学校の部活動を一生懸命やってなかった子どもが高校になって一生懸命やるという子もいる、逆もあるが、高校生の状況を中学生はあまりわからない。そういう機会もあると、高校と、中学校の連携というものがよりできやすくなるのではないかと。ただあまり無理はしない方がいいというところが本音のところである。

○幸田委員長
他にいかがか。

○小野委員
企業連携は入れないのか。

○事務局員濱田
環境整備の方を見ていただきたい。

○小野委員
承知した。

○幸田委員長
他にいかがか。
続いて3番、指導者派遣の説明をする。

○濱田事務局員
3番の指導者派遣であるが、顧問の技術指導を担保するために現在部活動インストラクターや、専門顧問の確保では、部活動指導員また、専門知識のある指導者派遣ということで、部活動支援指導者として、現時点では安全というところと強化というところを主眼とし事業を行っている。この事業は、次のプランでは採用しながら、これをどこに入れるとより効果的なのかということをもう一度整理し、配置していきたいと考えている。

併せて、地域指導者の活用というところで、総合型地域スポーツクラブと文化クラブの指導者等と、どのように連携できるかというところも模索していきたい。

○幸田委員長
指導者派遣について説明した。ご意見等願います。

○松本委員
部活動指導員に関しては特に期待をしている。私も昨年まで校長であったが、これから増やして欲しいなど思っているが、現状、今、県立学校では10人であり、例えば15人になり50%増えたところで、全体に対しての影響はさほどないのではないかと考える。どちらにしても、予算を取らないと地域連携などもなかなか進まないのではないかと感じている。

絵を描いたけどなかなか実現しないと、スポーツ庁とか文科省も絵は書くが、なかなか下にはお金を入れてこないというようなところがあり、そのところが大変難しく、ご苦労されているところであると思うが、頑張ってください。

聞いた話であるが、東京都は、校長の人事面接のときに、部活動指導員の希望数を聞かれるようで、総数が違うようである。そのかわり関東近辺だと高校に配置されているのは、神奈川、東京以外はゼロであり。あまり全国的にも予算がなくなかなかつけられない状況だと思う。やはりそういったところをつけていかなければいけないし、地域連携のところもやはり予算や、参加者の保障などがないと、なかなか二の足を踏む部分が多いかなと思うので、是非ともそこを頑張ってください。

○小野委員
予算の書き方だが、部活動インストラクターの予算も含めて書く方が見せ方としては良いのではないか。分けてしまうと、予算が貧弱に見えてしまう。インストラクターも含めて「指導者」として、書けば4億5000万円位になり、神奈川県は部活動にお金を使っているように見える。900万円では、貧弱すぎ

るので、対応した方がよい。書き方次第だと思う。

それとぜひ入れて欲しいのが、スポーツリーダーバンクである。

大塚委員、現状はどうなっているかを教えていただきたい。

○大塚委員

現状横ばいの状態であり、なかなかマッチングがしない。

○小野委員

であるならスポーツリーダーバンクの再活用などを入れてみたり、あるいは県の体育協会に神奈川県指導者連絡協議会というものがある。今、約4000人の指導者がおり、日本スポーツ協会の公認指導者登録している団体があるが、指導する場面がなくて困っている。活用の場面として、ここで活用してもらえように入れておくだけで指導者のモチベーションが上がるとともに、部活動として、ボランティア指導者の確保もできる。予算が無い現状で、幅広くこの指導者の派遣を考えていく必要があるのではないかと。

○西山委員

今横浜では部活動指導員が、運動・文化合わせて、今年度180人分の予算がある。3年後をめどに各学校に三名ずつ配置し、約450人確保する予算を取っている。

しかし、今年度180人の枠の中で使えたのは130であり、予算枠の確保とともにやはり人材の確保、先ほど小野委員もおっしゃいましたが、両輪で行っていかなければならないと感じている。

○幸田委員長

他にいかがか。

では3番の指導者派遣は以上とし、環境整備の説明に進む。

○濱田事務局員

環境整備であるが、サポート事業と評価検証事業の二つに分けている。

サポート事業としては現在も行っているが、中体連・高体連に対する学校体育団体への補助金、強化補助事業を考えている。強化補助金は、希望校に目的をプレゼンしてもらい、そこに予算をつける事業である。

評価検証事業に関しては、現在も行っている、表彰・表敬制度、部活動活性化推進協議会、企業等連携協議会事業、そして、かながわ部活の日である。

かながわ部活の日で、子どもたちの満足度を図っていくことを考えている。以上である。

○幸田委員長

環境整備について何か、ご意見また補足等あればお願いします。

○中澤先生

満足度等の調査をどこで行うかをもう一度聞きたい。

○濱田事務局員

かながわ部活の日で調査をすることを考えている。

○中澤先生

政策評価の調査事業は、盛り込むと思うが、実施し続けることが大事だと考える。

その時に、目標の指標として生徒の満足度がもし同意されるならば、その項目だけでなく、ガイドラインが遵守されているかどうか、県の方針等で進めてきたこともあると思うので、そうしたことを点検し

てチェックし、課題を浮き彫りにするとともに、サポートできる体制を構築する。また、ガイドラインを守りながら、さらに短時間で効率よく行い、こんなに楽しく満足度高められました、強化を図れました、すごく良い思い出ができました等、よきモデルというものを新しく表彰、表敬制度の方にもそれが繋がるような、今の時代の課題を本当にクリアできた実践っていうものを拾い上げられるような、評価検証事業も進められるとよいと考える。

○吉田委員

中澤先生よりお話があった満足度だが、満足度は何をもって満足なのかというのが分からないところがある。持続可能という言い方をしている事、そもそもこの部活動プランで考える「満足度という指標」が出てしまうと、顧問の先生はそれを見ながら指導していくこととなる。ただ単に満足といっても捉え方は様々、アンケートの内容、これから精査していかなければならないのではないかな。

現時点では、県のあり方というものが見えてこないのではないかなという気がする。もし案があればどのような内容のアンケートなのかということをお願いしたい。

○濱田事務局員

今、考えているところである。ご意見を参考に資料を作成していく。

○幸田委員長

他にいかがか。

○小野委員

検証事業の中にある、企業等連携協議会事業をもう一度説明願う。

もともとは指導者派遣や、企業のグラウンドや体育館を使わせてもらうなど、企業にいる指導者や実業団の一流選手を学校に送るとというのが主な事業だと認識しているが。何故、企業等連携協議会が検証事業としているのかを聞きたい。

○濱田事務局員

今まで行ってきている指導者の派遣等も考えている。

○小野委員

だとしたら、地域連携と指導者派遣の所にも入れておいた方がよいと考える。

○濱田事務局員

承知した。

○幸田委員長

他にいかがか。

○佐々木委員

感想であるが、ここの中に持続可能とか、人間力を育むなどの言葉が出てきているが、事業の中で、これをするから事業が持続可能になるなどという、明確なメッセージが見えない。人間力をこれだけ育むためにこの事業を行うなど明確なものがあつたほうが良いのではないかな。予算を付けるということも大事だと思うが、お金をかければいいという話ではない。どのように循環させていくのか、未長く続けていくのかということが見えないので、言い方が悪いが単発な施策だけになっている気がする。

神奈川県は大きな地域なので、日本のみならず世界に向けて活躍されているスポーツ選手などもいる。その方に逆に地域貢献で戻ってきてもらうなど、そういう働きかけや、施策があつても面白いのではないかな。

指導者目線という話もあったが、生徒目線でこれなら面白いというようなものが、少し出てくるとまさにその持続可能という部分もカバーできるし、人間力を育むということも含め、教育というところに結びつくのではないかと感じた。

保護者も安心するし、そのような事業があれば、安心して学校に預けられるのもあるし、もう少しメッセージ性が必要なのではないか。

○幸田委員長

他にいかがか。

では、最初の資料1・2、含めて全体を通し、何かご意見、ご質問、感想等願います。

またこのプランに限らず、今後の部活動のあり方等含め、ご意見等を頂戴したい。

○谷委員

何度も申し訳ない。教職員組合の中で養護教員の皆さんが養護部会を作っている。また保健連合会等で様々な県立高校の皆さんとも意見交換をしている中で少し話題になっていることであるが、部活動の大会やコンクール等で救護係を養護教員に頼まれるような現状がある。個人的に頼まれてしまい、どうすればよいか、というようなことが私たちのところに声として今届いている。

持続可能というところをこれだけ入れていただいているので、子どもたちの安全安心を考えたときに、養護教諭の皆さんは日頃自分の学校で接している生徒たちではない生徒の救護ということに対しては強い不安感を持っている方もたくさんいるので、ぜひ専門職である医療職の派遣等を考えていただきたい。

○幸田委員長

他に全体を通し、何かご意見はあるか。

○（ ）

新プランの方の3つの柱「研修」、「地域連携」、「指導者派遣」というところで、その前の5ページの中にも関わるが、これまでのところで成果を継承して将来的なプランにするために、新しいやり方、新しい計画という説明があったが、事前の4ページまでのところの課題や現状、そういうところに具体性を入れていかないといけないのではないか。趣旨などは何年前のものと同じであったりすることや、今出ている様々な意見も踏まえ、何故この課題が浮き彫りになったのかの根拠や、解決するための施策の根拠などを入れることにより、説得力がでてくるのではないか。

やってきた事業に対する根拠のある評価、出てきた課題を根拠を持って示し、その課題を解決するための施策を、根拠を持って示すことができるとよいと考える。

○幸田委員長

4ページと5ページの繋がりの方がまだ薄い状況だと考えている。

委員のお話もあったが、持続可能というようなイメージを鮮明にし、人間力の姿に具体性を持たせることで、誰もがイメージをわきやすくするなどの改良をするなど、4ページと5ページの間に入れていこうと考えている。

その辺りを含め、改めて作成していこうと考えている。

他にいかがか。

○小野委員

総合型地域スポーツクラブの連携というのは、現時点で高校には必要ない気がする。反面中学校には必要だと考える。ここは高校、ここは中学など、各事業で色付けをできないか。中学校はここを特にやって

いくや、細目に分けた目標値などができるとよい気がする。例えばインストラクターの配置を何年後まで何人にするや、部活動指導員の目標値を設定するなど、難しいが目標値であるから、できなくてもよいのではないか。書いてあるのと、書いてないのでは見え方が違うと考える。

中学と高校とでは、どうしても違いがある。県教育委員会が所管する県立高校と、市町村が所管する中学校であるので、違うと思う。それを1枚の紙で説明するのは無理なのではないかと常々思っている。そこに関してももう少し検討していただき、落とし込みができるか、できないかも含め考えていただきたい。

○幸田委員長

時間の関係であと1つ2つ、ご意見、ご感想等いただければと思う。

○大塚委員

ドリームプランの関係もいろいろ関わってきた中で、この部活動については様々な視点等、志向等、生徒、指導者、保護者など、余りにも幅広く、一本でなかなか完成度の高いものというのはいえないと思う。

時代の変化とともに、手をつけていくという流れの中で、時期としてはオリンピックが終わると、かなり色々なものが激変してくる。具体的なことは現時点では申し上げられないが、その時に、当然ドリームプランの期限が令和3年から令和10年というものがあるが、一定程度の仕組みの中での、見直しが必要になり、改定をするということは付け加えておかななくてははいけない。

次に、気が付いた点を申し上げる。

例えば2ページの生徒の意識というところは、示せるデータがあるのならば、数字で示していかなければならない。それから3番の負傷状況は運動部活動だけが記載されているが、文化部でも例えば腱鞘炎になるとか、文化部活動の特有の怪我のようなものがあるので、その記載も必要であると考えます。

今まで部活動のイメージは、月と太陽というような、運動部が太陽で文化部が月のようなイメージがあるが、払拭して両方とも見ていかないとはいけない。そしてまた新たなレクリエーションスポーツというものも当然入ってくるし、競技スポーツは当然高体連、中体連が、全国規模で、これはなくなる限り永遠に引き続いていくということもある。競技の観点と、そうでない観点、特別支援学校などもあり、障がい者のスポーツといった観点なども含めて検討していくべきなのではないかと感じている。

子どもたちの意見も、アンケートだけではなく、例えば一部の代表する子どもたちを集めてディスカッションをするなど、そういった場をぜひ設けるとよいのではないかと考える。

本当に幅広く、解決の糸口というのは、教員の負担ということもあるし、けれども、教員はそれを生き甲斐として頑張っている先生もいる。手をつけるところがあまりにもありすぎて、なかなか難しいところにでも着手していくという動きが、素晴らしいと感じている。

我々は、県立なので、県立高校の部活をイメージしがちだが、全部というわけにはいかないが、先ほど出たように、小中高の状況が違うし、先ほど横浜市なども含め、市が変わると状況が全然違うと思う。そういった幅広いものを一つ大きいプランとする時にはどうしても細かなところまで、行き届かないところもあると思うが、意見を伺いながら、その辺のバランスにも配慮しながら、それぞれの団体にもご理解いただき、大きなプランの作成、そして令和10年度までの長期的なものと同年度の振り返りも含め、年次計画も並行して示していくとよいのではないかと感じている。大変だと思うがよろしく願います。

○幸田委員長

全体的なものについては、そろそろ終わりたいと思う。

協議事項の方は終了させていただく。

3番、情報交換の議題の方に移らせていただく。

各委員の方から何か情報提供があればお願いします。

○松本委員

全国高体連でも話題になっているが、公式戦の平日開催を模索している県も増えてきている。ある県から調査が来るなど、全国調査も始まっているところである。中学校では始まっているところがあるかもしれないが、今後、中学校で平日開催となってくれば、高校でも当然のようになっていくことが予想される。先ほどの部活動の状況の(2)でも、活動の時間や、体調管理など、そういうことも含めて難しい部分もあるかもしれないが、今後検討していただきたいと思う。

また、先ほど怪我のことも出たが、怪我だけではなく、大きな問題として熱中症がある。平日開催すると大きな体育館が取れ、そこは冷房も入っており、安全・安心という面でも活動環境の担保ができる。そういう中で卓球やバドミントンは窓を締め切り、試合をやっていることを考えると、そういったことも模索していただけるとありがたい。

また、先ほど中澤先生からお話があったが、顧問を支えるということも、非常に大事なことである。関東高体連でも、色々な話がでていて、教員に対する手当や、非引率者の取扱など、大変大きな課題になっている。神奈川県の中でもこれまでそのような話があり、手当もなしで生徒の指導をしなければいけないような状況というのはやはり厳しい状況になるかと思うので、是非ともそのところを、皆さんの意見を出し合いながら考えていきたいと思う。

○幸田委員長

他にいかがか。

○三枝委員

スポーツ課は競技力向上ということも担っているが、スポーツ基本法の中に、特に国のいわゆるトップアスリートを育成するということが書かれており、自治体の方でも、そういうことを継続的にしていこうと法律で言っている。今、競技力向上を大きく支えているのは、正直言って学校の先生であり、そこには学校の公務と、競技団体の中の1人という2つの側面を持っている先生が沢山おり、学校の公務以外のところでもいろいろと頑張っていて活躍されている人がいる。サービスの問題や、謝金の問題などの解決は、いろいろなものを犠牲にしてやってくださっている、先生に対しては担保していかなければならないのではないかと。現状は逆行しており、冷遇されていっている環境というのが事実ある。

スポーツ課としては何とかこれを打開していきたいと思うが、やはり教育委員会と知事部局では全然話も違うので、そういった環境の違いがたくさんある中で、課題も山積していることも事実である。

大塚委員もおっしゃっていたが、これからいろいろなものが大きく変化する可能性がある中で、私もこの部活動のプラン作成に、保健体育課でも携わってきて、作り上げるのが本当に大変で、あれもこれもという要素がありすぎてまとまらないというのもあり、またオリンピックが控えている状況もあるので、私は個人的な意見であるが、時間を少し置いてゆっくり考えてよりよいものを作るということも必要かと感じている。

○幸田委員長

他にいかがか。

では、最後に中澤先生より情報提供を含めお願いする。

○中澤先生

少し今までの議論を振り返って発言させていただく。

満足率、満足度を政策目標にするのは、加入率よりベターだ、というように申し上げた。その考えは変わらないが、ただ満足度が本当の正解かと言うと、そこはまだこれから展開がありうると思う。というのも、おそらく政策の効果としては満足度が低い生徒がいたならば、君もう部活やめていいよとなる可能性がある。満足率の平均値を県教委に報告しなければいけないから、少し高めたいのだと。自主的、自発的な活動だし、いいよというようなことがあり得ると思う。

それはやってもやらなくてもいい部活動の本来の姿に近づくと、評価することができると思うが、一方で、佐々木委員がおっしゃったように、ちょっとしたきっかけで部活をやり、そこで成長する。先生方も部活動をきっかけに生徒理解、生徒指導を含め、うまく成長させるような今まで培ってきた実践が崩れてしまう可能性はある。また満足度は、サービス業のように、顧客を満足させることが果たして学校教育活動の一環としての部活動なのか、というところまで考えると、別に生徒を満足させるために働いているのではない、というようなことにもなりかねないので、ひとまず私は満足度というのが良いと思うが、そこからまた議論もあり得るだろうと思っている。

もう一つ、ガイドライン、ハンドブックと関係を少しお聞きしたが、今日の話だと、この課題の一部に今までのガイドラインの話が入っているということだったので、ここで大きく新部活動プランがグランドデザインとしてできるとするならば、これを踏まえたガイドラインの改定なり、ハンドブックの改定したばかりだが、その改定ということもあり得るのではないかと考える。

実は県立学校の休養日のあり方が半日活动を0.5日休日にするというような形は、私はおかしな話だと思っており、スポーツ庁との折衝はうまくいっていると聞くが、いつ、このことで突っ込まれるかもという危険性も感じている。

その他も、教員特殊業務手当も県の場合は国の水準を下回っており、4時間ベースというのを見直して、しっかり上げていく。さらに部活動指導員含めて中学と高校の財政的な違いというのはやはり義務教育国庫負担金が使えぬか使えないか。ただ、高校の場合は非常に県が頑張らなければいけないのだが、そうしたことも含めて、大切だったらしっかり守るということも大切なことである。

要求ばかりになってしまうが、話をしていくと、非常に問題意識を強く持ってらっしゃる方がそろっていると思うので、それをうまく表現し、これからも発信していくような、そうした新プランができることを強く期待している。

○幸田委員長

最後に委員の皆様方から、何かあるか。

○岩崎委員

学校閉庁日との兼ね合いですが、高体連、高文連、競技団体等の調整というのは進んでいるかどうか非常に気になる場所であるが、教えていただきたい。

○幸田委員長

濱田委員、何か把握されているか。

○濱田委員

学校閉庁日については、次年度から動き出すという方向で進めつつある。

標準として設定する日は、一応教育委員会として定めはするものの、最終的には各学校で定めるということになる。すべての学校が定めた学校閉庁日が少なくとも来年度について全く同一日になるわけではない。核になる日はあるが、核になるような日を示しているところについて、高体連、高文連さんとの調整をして、そこに入れないでくださいというのはできるが、学校事情でどうしても学校閉庁日が設定できないというようになった場合、そこではないところに学校閉庁日を設けている学校は出てくるのが予想される。

詳しいところについては所管している教職員企画課にお問い合わせいただきたい。

○幸田委員長

議事進行が、ご迷惑をお掛けし、遅くなったが、以上をもって推進協議会を終了させていただく。

本日は熱心にご協議をいただき、感謝する。

本日いただいた意見をもとに、今年度内に、新プランを精査させていただき、来年の8月に行われる、第1回の推進協議会の場で新プランとしてご提示させていただくか、今日お話を伺ったところで場合によっては大幅な変更をしたような形でご提案させていただくこともあるかと考えている。

また、皆様からご意見等をお聞かせいただければ大変ありがたく思っている。今後ともご支援、ご協力の方よろしく願います。

それでは進行を事務局の方に戻す。

○司会小松

以上をもちまして、令和元年度の第2回部活動活性化推進協議会を閉会させていただく。

本日の協議会の内容については後日、メールにて各委員に送付させていただく。ご確認をよろしく願います。

これで閉会する。